



2007・⑪

雪たねニュース

北海道版

No.316

今月の主な目次

○分娩前後の飼養管理の改善事例
○乳質改善について(乳房炎予防対策)

○営業所からの宅急便 シリーズ(2)
現地レポート:喜茂別町「牧場タカラ」の紹介
○雪印サプリメントのご紹介

時の話題

北海道農業の力を生かそう!

～北海道酪農は、もともとそれが持っている力を充分に生かして、畑作と共存していかなければならない～

昨今の原油価格高騰と地球温暖化対策の切り札として、米国をはじめ世界中がバイオ燃料の開発に熱を上げています。バイオ燃料(バイオエタノール、バイオディーゼル)を製造する際に大量に発生する蒸留かす、副産物を家畜の飼料として利用する研究が進められ、米国では中西部でトウモロコシの蒸留かすDDGSなどが養豚業を中心にかなり使われ始めているようです。穀物がバイオ燃料の原料として、家畜飼料との競合が顕在化する中で、北海道農業の持つ優位性や潜在能力を改めて考えてみましょう。

北海道の農耕地の3分の2は火山性土などの特殊土壌です。そのうち火山性土は35%を占め、重粘土15%、泥炭土9%で有機物が少なく、地力が乏しい傾向にあります。こうした土壌の特殊性から、北海道では農業の基本としてまず土壌の適正改良が最重点課題に位置付けられ、家畜の堆肥の有効活用こそ北海道農業の根本課題として研究され前進してきました。

明治6年(1873年)に畜産専門家としてのエドウィン・ダンが米国から乳牛42頭、綿(緬)羊100頭を輸送して来道し、北海道酪農の基礎が固められました。

大正10年(1921年)にデンマーク農法の普及を行い、水田万能の北海道農業に乳牛を導入し、酪農の発展を図り、てん菜の栽培を奨励し、冷涼な気候・風土に根付いた適地適産による農業振興方針が樹立されました。

昭和2年(1927年)にデンマーク農法の普及に基づき、第2期拓殖計画が実施され、乳牛を中心とした有畜農業の方向が打ち出され、酪農振興の熱が高まりました。

以来、多くの先達の血のにじむような努力によって高品質の生乳を生産する世界に冠たる北海道酪農を作

り上げました。

今は大別して、①配合飼料・濃厚飼料多給で、1頭当たりの泌乳量年1万kg以上目指す酪農、②土壌を作り、牧草を作り、それを管理することに多くの労力と資本を投下する放牧型の酪農が共存しています。経済環境、土地条件などを考慮し、どのようなタイプの酪農を目指すか再度の選択が必要になってきました。

北海道農業は、家族経営を主とした農家自らの土地を大切にすることをモットーとした基盤が創られてきたと思います。経済的先進国である日本における北海道農業は、経済性を先行させ、経営の合理化(コスト軽減)を導入し、規模拡大を目指し、耕畜を分離し、畑作農業と酪農が各々の道を歩み、糞尿処理問題、連作障害問題を抱え、環境に負荷をかけながら、今日まで来たことを再考する必要があります。北海道酪農は、乳製品の供給だけでなく、北海道の火山性土が多い農地の地力を豊かにしてきたことを忘れてはなりません。経済的合理化により、規模拡大し分業化した耕地農業、酪農業ではありませんが、両方が共存することが将来の北海道農業であると考えます。北海道酪農は、北海道畑作農業を守るためにも重要な地位を占めています。

北海道農業をひとつとして考えた場合、まずは、豊かな地力のある農地づくりをはじめとする畑作農業との連携、乳牛の健康(ストレス等を排除)を第一とした環境づくり、環境保全、観光産業(都会人のストレスの解消)を導入した酪農業を次世代北海道酪農の目標としてはいかがでしょうか。

また、規模拡大で耕畜農法が分離され、堆肥も道内で偏在していることが伺えます。施設園芸では、農地の塩害が発生し、客土が必要になってきます。都会では、家庭菜園も広まってきていますが、そこでも堆肥が必要になってきています。北海道の農畜産物だけではなく、北海道の堆肥を家庭菜園に供給していくことにより、より豊かな菜園作りにも貢献できると思っています。

(独立行政法人農畜産業振興機構札幌事務所長

武居 正和)